

木と共に生きて

細田忠治

6

集団疎開担出し

私は1957年（昭和32年）に正式に細田木材へ入社したが、木材へのかかわりといえば40年（同15年）千石町に住居付き工場にいた国民学校の2年ごろだ。材木を担いだのは国民学校6年生で集団疎開したころで、製材所へ勤勞奉仕に駆り出された時だ。

立ち会い玉とり

45年（同20年）8月15日の終戦後東京へ帰ってきたが、一面の焼け野が原で、木場で一番に工場を回したのは細田三郎製材所であった。

戦後、家がなくバラック住宅用材だが、挽けども挽けども間に合わず地方から杉の板割を仕入れ復興需要に対応していた。この時期、私は新潟から帰ってきたの鼻たれ小僧だったが、駅から引き取りの立ち会い玉とりに駆り出された。

上野、錦糸町、小名木川などの貨車駅に馬車を何台も横付けし、復員兵あがりの担ぎ出し人足が威勢よく歩み板を渡って担いでくるのを等級、長さ、幅、入り数別に亀の子または正での数確認をさせられた。いわゆる木場言葉で言う「玉とり」と称する役目だ。

これが結構業に見えても、んでもない大変重要な役割だ。何でもそうだが、商品の受け渡しは商売では最重要だ。

ここで仕入れ先からの数量が違っていたのでは、商売に差し支える。儲けるか損するかの境目で現金つまりお札を数えているのと同じことだ。少なく間違えれば買い方の得、多く間違えれば売り方の得となる。そこでここが商売の第一線だ。

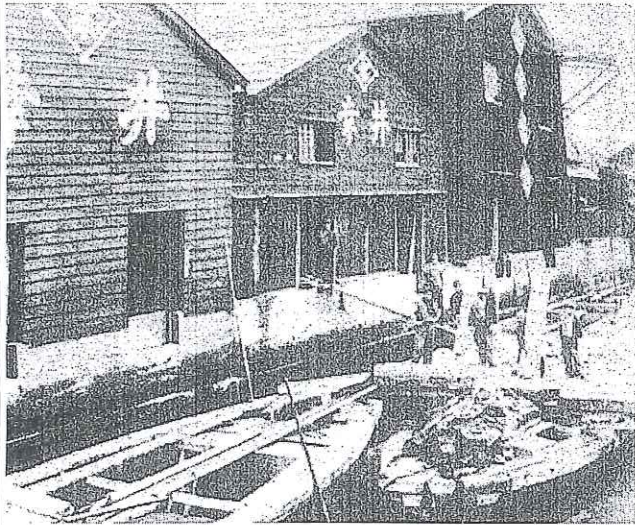
12歳から荷受現場で鍛えられる

木場内の問屋では、荷主さんや仲買さんからお預かりする。ここで最初は雑巾がけから拭き掃除、荷出し荷受けの担ぎ出し、夜は帳面付けと仕込むわけだが、商売を教えるのは玉とりだ。

荷受けのときは、貨車、馬車、ダルマ船、ハナキリとハリツケと称する係がいる。担ぎ出しより上のものがこの役に当たる。

ハナキリは担ぎ出しが肩が入るように、肩の付近まで持ち上げる役目だ。

ハリツケは馬車の積み込み担ぎ出しの肩から、受け取り、積み上げ



堀に横付けされるダルマ船（「木材新聞」深川木場より）

お札でいえば、先ず偽札はないか、半分千切れているような流通不能札はないか、1万円札のなかに5000円札、10000円札があれば記帳を間違えないようにする。

このように、荷受け荷渡しはハナキリ、担ぎ出し、ハリツケとそれとここでいう玉とりの登場だ。

◇ここで教訓 受け渡しは立ち会いで確認しなければならぬ。

荷受け荷渡し、そしてお金のやり取り

小僧さんから手代さんになった時の最初の仕事がこの玉とりだ。お札と同じ間違わないように、しかもごまかされないようにする。

ハナキリが一等で8寸2束というのを聞くだけでなく、本当に一等で8寸2束かどうか、もしも二等や7寸が混ざっていないかを目で確認する。これが大変な離れ業だ。

貨車、人足、馬車ともに石（こく）いくら動かして「なんば」の世界、ぐずぐず

ずしている、怒鳴られてしまう。怒鳴られるだけならその場限りだが、人足に「あの店は、小僧が愚図だ。仕事が遅くて稼げない」と評判が立つたらもうおしま。次に頼んでも、親方は人足を回してくれない。

人手不足のなかで仕事はいくらでもある需要超過時代のため、これでは人足が集まらず大騒ぎとなってしまう。間違わないように、目を光らせる。人足は冬でもシャツイ一枚が威勢のよいのは六尺ふんどし一丁の裸人足もいる。玉の汗だ。

玉（きよ）とりは不動の姿勢で神経を研ぎ澄まし、手をかじかませるふるふる震えながらの作業だ。寒いから厚着しようとする、と、「お前、担いでいる人たちのことを考える。いなかったら荷物も動かさない。何もせずに寒いから厚着するとはこの罰あたり」と叱られたものだ。

◇ここで教訓は2つ 荷受け荷渡しは現金の受け渡しと考えよ。もう一つは自分のことより働く人のことを第一に考えよ

「切った、張った」の真剣勝負

玉とりは、売り手と買い手双方で検査し合うことだ。

2人がそれぞれの立場で品物を見る。買い手は欠点を探し、売手は隠そうとする。買い手は等級や寸法を、そして数量までの間違いはどんな間違い方をするか、買い手は等級や寸法、数量を必ず少なく間違える。

これが不思議なことだが、商売人の心理で、どうしてものようなことにな

る。売り手はこの反対になる。

材木屋の7不思議

荷渡しが終わると、双方の玉取り玉合わせが必ず合わない。

何故か、材木屋の7不思議だ。こんな時には、どう解決するのか。送り状と照合のうえ、足して2で割ることになるというところは、有利な間違いの多い方が有利になる。これは、お分かりのことと思う。従って、このやり取りが「切った、張った」の真剣勝負だ。

◇ここで教訓 荷受け荷渡しは真剣勝負だ。そこで、各お店ともに、優秀な、手代を送り込み、少しでも儲けを確保しよう、と、躍起になる。私は小学校6年の小僧からやらされた。今にして思えば、ベテランの手代さんにごまかされた上に口車に乗せられた、損したのではないかと

思う。

店へ帰ると、親父が「ご苦労様、寒かつただろうストーフへあたれ」までは長い、送り状をみて大きく訂正されたのを見て、「お前何してんだ。これだけごまかされたんだぞ、しっかりしろ」と言われたことを、今でも覚えている。

◇ここで教訓 はっきりと自己主張を通したうえで、相手の言い分を聞き、最後は話し合いで解決することだ。何事も最後は話し合いだ。

次回回は来年1月15日付（細田木材工業協会会長）

訂正 前回「弟孝治」とあったのは「孝治」の誤りでした。